9 月 19 日のメッセージ

聖書：エフェソの信徒への手紙　5：　1－5

「愛によって歩みなさい」

外からキリスト教を見ている人から、キリスト教には戒めが多いと指摘されることがあります。確かに十戒を筆頭に、聖書中には多くの戒めが登場します(「あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。隣人に関して偽証してはならない。隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」出エジプト記 20:12-17)。

その戒めの一つひとつを「ねばならない」と守ることが信仰なのだと思う人もあるでしょう。しかし、「ねばならない」には限界があります。なぜなら、全てを完全に守ることは、人間には難しいからです。一方、「あれもやった」「これもやった」と、できたことを数える姿は、イエスの前に立つ金持ちの青年と何ら変わることがありません(「そこで、この青年は言った。『そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているでしょうか。』」マタイによる福音書 19:20)。自己満足に終わってしまいます。

また、自分が戒めを守ることに一所懸命になるあまり、周囲の人にもそれを強要することもあります。「クリスチャンのくせに」と非難する言葉を伴って。戒めを守ろうとする姿勢自体は良いことですが、戒めとは誰かに強制されるものでも、誰かを強制するものでもありません。

神の道をまっすぐ歩むために戒め=掟はあります(「イエスは言われた。『なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。』」マタイによる福音書 19:17)。

神の創造されたこの世界のもの全てと共に、神が愛されたもの全てと共に、隣人と共に歩むために、戒めはあります。罰則があるから仕方なしに守るのではありません。神の道を歩む上で、自分を律するために守るのです。

だから、「守れた」「守れない」と一喜一憂するのではなく、この戒めによって神は私にどのような道を示そうとしておられるのか考えることが大切です(「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」エフェソの信徒への手紙 5:2)。

自己満足に陥らないように、常に新しくされることが大切です。神の戒めは絵に描いた餅でもなければ、目標として掲げられたお題目でもありません。古びることなく常に新しい響きを持って私たちに迫ってくるものです。私たちに呼びかけてくるものです。

自らを振り返り、「道を示してください」と、神と向き合い続けることで、私たちは戒め=掟と共に生きて行くことができます(「主よ、あなたの掟に従う道を示してください。最後までそれを守らせてください。」詩編 119:33)。そして、私たちは今日も神の示される愛の道を歩み続けるのです。